

中期西田哲学の広義に於ける行為的一般者と否定性
"Acting Universal in a Broad Sense" and Negativity in Nishida's The Self-Aware
System of Universals

落合開智 (立正大学)

Kaichi OCHIAI

西田幾多郎の論文「叡智的世界」は判断的知識の成立を「一般者の自己限定」と見ることから論理を展開し、一般者の包摂関係の推移を辿ることによって実在とは何かを論じたものである。その中で行為的自己の自覚は単に叡智的一般者の一段階として数えられ、客観的知識を意味する「真理のイデア」を見るものとされた。しかし、論文「叡智的世界」内にて註記されている通り、「ノエシ的限定の立場からは行為的限定の意味を広めて叡智的一般者のすべてのノエシ的〔限定〕を特徴付けることができる」(『西田幾多郎全集』第五卷(岩波書店、1947年)、159頁)とされ、行為的自己の自覚は、叡智的一般者のノエシ的限定全般を特徴付けるものと位置付け直されている。ここでノエシの語は無限の自己志向性の意義を持ち、ノエシ的限定とは自覚を作用の形式で表したものである。「總説」でこの行為的自己の自覚は、「広義に於ける行為的一般者」と呼ばれる。ノエシは「叡智的世界」論文中で「叡智の世界に於てノエシの方向に立つものは、いつも反価値的である」(同上、175頁)と述べられるように、限定されたものによる限定であるノエマ的限定とは異なり、ノエシ的限定はその無限の自己志向性によって、一つの「有る」という形に終着しない。叡智的一般者における有である「価値」はその裏に「反価値可能」が含まれることで、ノエマ的限定である形而上学的実在を脱し、活動性を持った真の実在である「迷える自己」として現れ得る。ゆえに広義に於ける行為的一般者の自己限定は、単なる自己構成的作用と考えられるべきではない。むしろ、ノエシの方向に立つものの本質はノエマの方向にある「有」の否定であり、我々の自己は否定によってのみ「迷える自己」足り得て、それが「一般者の自己限定」と表現されるのである。そこで本発表では、「總説」論文の広義に於ける行為的一般者を反価値性の観点から読み解くことで、「迷える自己」を裏付ける「絶対無の場所の自己限定」において否定性が如何なる意味を持つかについて論じる。